Jazz Interview Vol.37

自身のピアノラボを開講した名ピアニスト！

大西順子【Junko Onishi】

2012 年 11 月にトリオによる国内クラブツアーを終え、プロ演奏家としての活動を引退したジャズ・ピアニストの大西順子。「研究者でいたい」というメッセージと共にジャズ・シーンの第一線から退いた後、その動向に注目していたが、昨年夏に行われた「サイトウ・キネン・フェスティバル松本」では世界的指揮者、小澤征爾との共演が大きな話題となった。

衝撃的だったデビュー・アルバム『WOW』。『ビレッジ・バンガードの大西順子』の「ダーン・ザット・ドリーム」は何十回聴いたか分からない…。1990 年代半ば、本場ニューヨークのジャズマンたちと台頭に渡り合っていた姿は純粋にカッコ良く、ちょうど同じ頃、西海岸ではメジャー・リーガーの野茂英雄が大活躍していたが、野茂選手の活躍とダブるように日本人ジャズ演奏家として誇りにさえ感じていた。その後、2000 年 3 月の大阪公演を最後に活動休止。2005 年に演奏活動を再開後、2 枚のアルバムを残して引退を表明。

そして、今年 4 月にピアニスト大西順子の第 2 章ともいえる『大西順子ピアノラボ』が開講された。ジャズ・ピアニストとしての経験を人に与えることで、これからの自身の音楽体験も豊かにしていきたいという大西順子に、ピアノ、ジャズに対する思いを赤裸々に語ってもらった。

【2014 年 5 月 14 日（水）『大西順子ピアノラボ』にて　取材＆文：加瀬正之】

♪まずは『大西順子ピアノラボ』開講のきっかけについて聞かせて下さい。

昨年夏の「サイトウ・キネン・フェスティバル松本」で開催された勉強会は 1 週間だけの集中講座だったので、もっと長い期間でやりたいと感じたのと、小さなスペースで良いので、じっくりと多角的にピアノという楽器、ジャズの様々なスタイルをマンツーマンで模索していけるような機会が起こり得ないかなという思いがきっかけでした。

♪『大西順子ピアノラボ』と名付けた経緯は？

『大西順子ピアノ教室』っていうと何かちょっと…という感じですよね（笑）。それで、ピアノに関していろいろと試行錯誤していこうという意味で“ラボ（＝研究室）”と名付けたんです。でも、そう決めた直後に、あの「理研」の問題が出てきてしまったんですけどね…（笑）。

♪引退表明時の「研究者でいたい」という思いを実現された形ですね？

ああいう言い方はいろんな人に誤解も与えたみたいですけど、要するに自分の中に特に表現したい音楽がなくて、全然フレッシュではないことでも続けること、人前に出続けるということは確かに大事なことなのかもしれないですけど、私は少し違う観点で、自分の中に表現したい音楽がないなら、自分の中に入れたものを誰かに与えよう、それで一度空っぽになるんだったら、それもありなのかなと思ったんです。

♪『大西順子ピアノラボ』のコンセプトについて聞かせて下さい。

ピアノに限らず全ての楽器がそうですが、特にピアノは楽器の鍵盤のサイズや形は一通りしかないのにみんな異なる体格、異なる手の大きさや形で対応しなくてはなりません。教科書通りということはまずあり得ないと思いますし、生徒一人一人に合った奏法を模索する必要があるんです。そういうことから完全マンツーマンでやらせて頂きます。奏法には色々ありますが、外国の体格に恵まれている人たちを見ると、ほぼ全てのピアニストが身体を効果的に使って良い音色を出す奏法（＊クラシック界では重力奏法やロシア奏法と呼ばれる）を身に付けていますが、なぜか日本では手を極端に丸めて、指一本一本を高く上げてから打鍵するという弾き方をする人が多いと私の目には映ったんです。ここではその体重を上手く使う無理のない弾き方を基本に、ピアノという楽器をしっかり鳴らすこと、更に求める様々な音色を実現する数あるタッチヴァリエーションを身に付けることを目標としています。

♪体重を上手く使う奏法は簡単に身に付けられるものなのですか？

自分の身体を上手く使って、鍵盤の奥にのめり込ませるように体重を乗せるイメージです。指の部分だけで弾いていると、自分の体重をかけたり、自分の身体を上手く使えないんですね。最近は日本人の女性プレイヤーも増えてきていますけど、ただでさえ身体が小さいので、海外のプレイヤーたちと同じような音は出てこないんです。これは勝ち負けではないんですけど、あれほどのクオリティは出せなくても、せっかく何十キロもある体重を有効に使った方が良いということですよね。ずっと手が痛くて悩んでいたという女の子が何人かここに来られたんですけど、必ずみんな指の部分だけで弾いていて、変に脇を締めていたり、余計な所に凄く力が入っていることが多いんです。なので、そういう所から丁寧にやっていかなければいけないんです。この奏法を身に付けるまでに時間が掛かる人もいれば案外早い人もいますが、ある意味、自分の体にとって自然な動きなので、その感覚を一度覚えれば悪い方に戻ることの方が少なくなるんです。その結果、手の、つくべきところに必要な筋肉がついてきて基本となる力強いタッチが実現出来、また怪我などが少なくなるんですね。一人で練習すると分からなくなってしまうので、意識して、手応えを感じるまでは、ある程度連続してここに来て頂くことが理想なんです。

♪その奏法はライヴの時などにも差が出てくるのですね？

そうですね。ライヴハウスでも指の部分だけで鍵盤をパタパタと弾いて、鍵盤の表面だけでしか鳴ってない音をマイクで拾って、それをスピーカーから鳴らすと、結構はっきりと音に出てしまうんですね。あと、私がアメリカに居た頃は、ベースのクリスチャン・マクブライドとか、あの世代のジャズマンたちと活動期間が重なっていて、今の時代と真逆と言いますか、生音を大事にしよう的なムーブメントがあったんです。ベーシストがみんなアンプを使わず、無理矢理でも高い弦高で弾いて腕を壊すみたいな…（笑）。あれはあれでちょっと極端過ぎたかもしれませんし、テクノロジーを上手に使えればいいんですけど、でも、もとの音がペラペラなのにいくらテクノロジーで音を拾っても、かえって悪い部分を増幅してしまうので、やはり基礎はちゃんと学ぶべきだと思うんです。

♪弾き方の大切さと共にジャズ・ピアノも教えられるのですね？

奏法と同じようにジャズという言語の文法とか、使うべき単語などがある程度存在すると思いますし、広範囲化された昨今のジャズ・ピアノの中でも、特に4ビートというリズムの上で如何にスイングするか、そして、コアとなるスタイルであるブルース、ストラッド、ビバップ、モーダルに焦点をあてて多角的に勉強することを目的としています。これら全ての要素の勉強は将来どんな音楽を目指そうとも必ず大きな自信と確実な結果をもたらすと思いますし、ある程度できた方が、その先どこに行こうとカッコ良いんじゃないかとも思うんです。

♪一緒に教えられている青柳いづみこさんについて聞かせて下さい。

クラシック・ピアニストで文筆家としても活躍されている方で、私が青柳さんのファンだったんです。昨年の「サイトウ・キネン・フェスティバル松本」の時に取材してくれたんですけど、そこで意気投合して、ここで協力して頂くことになったんです。青柳さんがピアノやピアニストについて書かれたものが凄く好きで、一番最初に読んだのは『翼のはえた指』という本ですね。青柳さんが書いたものを読んで、なぜ日本ではみんな変な弾き方をするんだろうと、日本に帰って来てから特に思っていたんですけど、それに対する答えが青柳さんの本に書いてあったんです。戦前くらいから、ピアノという楽器に対して日本人がいかに苦労してきたかということを知ると、実際に教育の現場ってそこから何も変わっていないんですよね。だから、青柳さんの本を読むと目からウロコだったりするんです。フランスやいろいろな所で勉強された方で、タッチに関しても凄く勉強されているので、今回相談役といいますか、ピアノ演奏の基礎となる勉強で協力して頂いているんです。

♪生徒に一番学んで欲しいことは何ですか？

私はこれまでは批評などをされる立場だったんですけど、少し心外だなと思っていたのは、「ピアノを叩く」と言われることが多かったんですね。ですが、私の手、指は幸運にも正しく筋力が付くことが出来たので、それにより柔らかく可動域も広

く取れて、各指が良く分離しての動きが出来るようになっているので、リズムをはっきり出す時や音を際立たせる時には大きく動くことから、一部の方には叩くように見えるらしいんです。勿論、私の弾いている内容に好きずきあると思いますが、タッチと座り姿勢だけは過去の共演アーティスト、またクラシックの演奏家からも褒められることが多いです。日本でとても多い指の部分だけで弾く弾き方だと、鍵盤の部分しか動かないので、鍵盤しか鳴らなくて、ピアノの胴が鳴らないんですね。シンセサイザーみたいにわざとそういうタッチの弾き方もあるんですけど、せっかく生ピアノなので、やはりちゃんとした音を鳴らして欲しいですね。

♪演奏者から教育する側に回られて何か違いはありますか？

自分の中では教育するという感じはないんですけど、私がアメリカに居た頃は、例えば、「ブラッドリーズ」という店があったんですけど、そこにはカーメン・マクレエの凄く良い音のするピアノが置いてあって、仕事が終わった後にいろいろなミュージシャンたちが遊びに来て、あり得ないような組み合わせのジャム・セッションが普通に行われていたんです。そういう場で歴史の一端みたいに昔のジャズマンの裏話を聞けたり、実際に腕もそこで磨けましたし、そういう場があったんです。でも、日本って電車も遅くまで動いていないですし、防音のマンションとはいえ、ベースやドラムはダメだったりとか、音がちゃんと出せるような場が本当にないんですよね。何気にいろんな人たちが集まって、遊んでいるうちに何か生まれるみたいな、そういう場があればいいなあというのが一番なんです。なので、教育していこうという感じでは全然ないんです。

♪ジャズ・ピアニストとして一番大事なことは何だと思いますか？

やはり音は大事ですよね。その音を出す効率的な体の作り方ですね。私が恵まれていたのは、アメリカに居た当時は 50 年代に活躍したジャズマンたちの演奏を間近で聴くことができて、レッスンも取りましたし、聴こえてくる音が全然違ったんです。向うの人たちは腕から何から重いですし、その重みを上手く使って自然に楽器が鳴るんです。ベースなども同じように、はっきりと音に出てしまうと思うんですけど、そういうことを知らずに YouTube だけ見ていたら分からないことを実際に体験できたことはとても大きかったですね。なので、そういうことに興味がある方がいれば、何でもしていきたいと思いますね。あと、ピアノという楽器がどういう風に出来ていて、どうやって音が出ているのかということを全く知らないでピアノを弾いている人も結構いるので、その辺のことも知っておいて欲しいですね。

♪どのようなジャズ・ピアニストを育てたいですか？

私の時代は「モンクを聴け！」「ウィントン・ケリーを聴け！」みたいな少し偏っていた時代で、キース・ジャレットが好きって言うと「ええっ？！」って言われたりするような時代だったんですね（笑）。でも、ある種の偏りが無くなった大変自由な音楽シーンとなった現在の状況で、やはりコアなジャズの土台がしっかりあるアメリカって凄いなって思うんです。その土台を軸にしてジャズ以外の音楽から大いに影響を受け、決してジャズの土台が薄まることなく、更にフレッシュなサウンドを作るミュージシャン（例えば、ジェイソン・モラン）が出てくるアメリカはやはり凄いですよね。残念ながら、日本では裾野を広くすると薄くなってしまうという欠点のような所があるんですよね。これだけ長いことジャズを支援している国として、そろそろ本当に懐が深いプレイヤーが出てきてもいいなと思うんですよ。なので、そういうピアニストがもしここから出たらとても嬉しいですね。

♪『大西順子ピアノラボ』の今後の目標を聞かせて下さい。

まだ開講したばかりなので、直ぐに実現することは難しいですけど、ベースとドラムと一緒にセッション出来るクラスを作ったり、生徒が人前で演奏できる場が作れたらいいなと思っています。

♪引退されてからジャズの聴き方や見方は変わりましたか？

立場というよりも、若い時はほとんど聴こえていなかったものが、歳を取るにつれて細かい所がどんどん聴こえてきてしまうんです（笑）。何てレベルの高い音楽なんだろうって思いますね。

♪ところで、引退を決断するまでは結構悩まれたのですか？

勿論、悩みましたね。19 歳の頃にアメリカに渡って、バークレーに通っていた時は、チック・コリアが流行っているとそれを真似したりもしていたんですけど、ペニー・グリーンの紹介で出会ったウォルター・ビショップ、ジュニアやずっと憧れていて漸く会うことができたジャッキー・バイアードなど、その他大勢のリアルタイムでジャズの歴史を歩んできたような人たちと出会ってしまったんです。そのレジェンドたちとの交流からジャズのコアな部分をちゃんと深く勉強しなくては全く意味がない、どんなに時間が掛かっても勉強すべき価値があると思ったんです。でも、もう既にある音楽なので、私が作る必要性があるのかということをいろんな人に言われたり…、新しいものではないので、音楽の上で大発見みたいなものがあるかないかって言われれば、多分ないだろうなと思ったり…、フレッシュでないと言われるものを作って、それでお金をもらうことが果たしてありなのかと思ったり…、新作を作りながらも、かなり長い間自分自身で悩んではいましたね。それで、2012 年の引退前に『パロック』というアルバムを作って、そこで自分としてはとりあえずひと段落していいんじゃないか、ジャズの勉強に関しても個人的な満足感を得た感じがしたんですね。実際にそこから先、次に何を作るかっていうことを凄く悩んだりもしたので、逆に作らないっていう手もあるのかなあと思ったんです（笑）。

『大西順子ピアノラボ』【＊レッスンについて等、詳細は P16 をご覧下さい。】

♪今後プレイヤーとしての復活はあり得ますか？

今もずっとピアノは弾いていますけど、自分の中で発表したい音楽なども特別ないですし、将来的にはあるかも知れないですけど、今のご時世、そうそうチャンスがまた来るとは思えないですし、とりあえずもう退いていますかね…。

♪ジャズを聴いたことがない人に薦めるアルバムを一枚挙げるとしたら何を選びますか？

デューク・エリントンのビッグ・バンドですかね。音やスタイルが古過ぎることもありますけど、ディジー・ガレスピーが参加している『ジャズ・パーティー』は特にお薦めですね。このアルバムに入っている「U.M.M.G」などは、ジャズのカッコ良い所が凝縮されていますよね。

♪今のジャズ・シーンについてどう思われますか？

薄まってしまっている感じはしますね。ジャズって元々スタンダードを自分なりに演奏するということが割りと多いと思いますし、私も以前スタンダードを演奏したアルバムをリリースしましたが、これは昔から思っていたことで、自分でも演奏してみて確信したんですけど、ジャズにおいてスタンダードを演奏するのと、例えば、R&B やポップスなんかのヴォーカルものをただインストにカヴァーするのでは全然意味が違うと思うんですよ。あらゆる解釈で演奏され名演だらけのスタンダードをやるにはもっと切実な表現欲があってのことであるべきだと思います。スタンダードを自分の解釈で演奏することと、カヴァーという名のもとにそれを普通にアルバムとしてリリースしたりするようなことがごちゃ混ぜにされてるというか、曖昧になってしまっている所もありますよね。あと、強烈な個性があまりない気がしますね。アルバムを聴いても、「あ～ビックリした！」というようなことがないですよね。そうなると、やはり昔のジャズや昔の音楽を聴いてしまいますよね。

♪大西さんがお気に入りだったベーシストは誰ですか？

私が個人的に安心して弾けたのはレジナルド・ヴィールですね。彼のビートは本当に凄くて、他にはいなかったですね。あの恵まれた体格も含めて、全てがベース仕様に出来ているという感じでした。同じ世代ではクリスチャン・マクブライドとか、ロドニー・ウィテカーも素晴らしいんですけど、レジナルド・ヴィールは私にとって特別ですね。

♪音楽以外の趣味は何ですか？

今は水泳にはまっているんですけど、基本的に体のことを考えるのは好きなんです。どこにどう体重が乗れば良いのかとか、体幹のこととか。あと、映画鑑賞や読書ですね。

♪ 大西さんにとって “ ピアノ ” とは何ですか？

難しい質問ですね～。4 歳くらいからのかなり長い付き合いなので…。でも、結局は “ 相方 ” になってしまいますね（笑）。

♪最後に「The Walker's」読者と大西さんのようなアーティストを目指す人たちにメッセージをお願いします。

私が弾いている所を見ると叩いているように見えるかもしれないですけど、ピアノという楽器はそうではないということ。これを機会にジャズをもっと根本から勉強したいと思っている方がいれば、私が勉強してきたことで助けになるんでしたら、喜んで助けになります。あと勿論、私の教えることが絶対に正しいとか、そういうことは全く思っていないんですけど、最低限体を壊すような弾き方はしないで欲しいと思っているので、もしそのようなことで悩んでいる方がいれば、『大西順子ピアノラボ』という場所もあるんだと思って頂けると嬉しいですね。

大西順子 公式 WEB サイト：http://junkoonishi-art.com/